

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 織田作之助『夫婦善哉』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)



法善寺の『水掛不動』

第 26 回のツイキャス読書会の課題図書は、織田作之助の『夫婦善哉』です。

[青空文庫版のテキストはこちら](#)

[朗読はこちら](#)

今回は、たくさんご提出頂きました。読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

大正時代の大阪。小さな貧乏天麩羅屋の娘として育った蝶子は尋常小学校卒業後、半年の女中奉公を経て17歳で芸者になり、その持前の明るいお転婆な気性で、陽気な座敷にはなくてはならない人気芸者に成長する。ところが安化粧問屋の若旦那で妻子持ちの維康柳吉と出会って三月でいい仲となり、柳吉が東京に集金へ行くのを機に駆け落ちをした。時に柳吉31歳、蝶子は20歳だった。しかし集金後、熱海で関東大震災に出くわした二人は一度大阪の蝶子の実家に戻り、黒門市場の中の路地裏の二階に間借り生活をはじめた。蝶子は職のない柳吉に代わり、ヤトナ芸者（臨時雇いで宴会に出張する有芸仲居、現代でいうコンパニオン）で稼いで来るが、柳吉はその金でぶらぶらとカフェに出掛けたりしていた。

柳吉は実家の父親から勘当され、妻は籍を抜き実家へ戻り、5歳になる娘は柳吉の妹・筆子が面倒を見ていた。柳吉は正月の紋付を取りに行くという口実で実家に行ったものの娘に会わせてもらえず消沈し、蝶子がやっと貯めた金にまで手をつけ、飲んで放蕩する始末だった。しかしそんな柳吉を折檻しつつも、家を飛び出して楽天地横の自由軒でライスカレーを食べるうちに、すぐに柳吉が恋しくなる蝶子であった。柳吉は、実家の妹が入り婿を迎えることで父親から廃嫡され、財産相続と一人娘への愛情とで実家への執着から離脱できずに心がふらふらし、実家と蝶子への愛との間で腰の定まらないままであった。一方で蝶子は、柳吉の娘を引き取って晴れて正式の夫婦として柳吉の父親に認知してもらうため、柳吉を一人前の男にしようとする。資金を貯めては二人で剃刀屋、関東煮屋（おでん屋）、果物屋と転々と商売をするがなかなかうまくいかず、結局は柳吉の浪費で失敗に終わるのだった。

やがて柳吉は腎臓結石を患う。入院や手術で医療費がかさみ、蝶子は再びヤトナに出るが焼石に水で、実家の母親・お辰も子宮がんで余命幾ばくも無くなり苦労が重なった。柳吉の妹・筆子が、12、3歳となった柳吉の娘を連れて病院に見舞いに来た。筆子は、「姉はんの苦労はお父さんもこの頃よう知ったはりませ」と、有難い金を握らせてくれ、蝶子は維康家にやっと夫婦として認められたと思いき喜んだ。柳吉は退院すると湯崎温泉で出養生した。蝶子が会いに行くと、柳吉は養生どころか、毎日のように芸者を揚げて散財していた。その金は妹に無心していたのだった。自分の腕一つで出養生させていればこそその苦労が水の泡だと、蝶子は泣き逆上した。

蝶子は柳吉と一緒に大阪へ戻り、日本橋の御蔵跡公園裏の二階に間借りした。ある日ヤトナ仕事の帰りに、昔の芸者仲間だった金八にばったり会った。二人は昔、けちな抱主を見返してお互い出世しようと誓い合った仲だった。金八は鉾山師の妾から、本妻の死後に後釜となり、裕福な境遇となっていた。金八は、必要なだけの金を無利子で期間無しで貸すからと、蝶子に新たな起業を勧めてくれた。占い師に水商売がいいと言われ、蝶子と柳吉は下寺町電停前にカフェ「サロン蝶柳」をはじめた。店の女給は下手に洋装したパーマ女などは置かず、日本髪か地味なハイカラの娘ばかりにし、繁盛店となった。新入りの怪しい女給が店の客を連れ出し売春稼ぎをし風紀が乱れる時もあったが、女給をすべて温和しい女に入れ替えると家族的な店に変わり、新聞社関係の客の馴染み店となった。

そんな折、柳吉の娘が祖父（柳吉の父親）の危篤を知らせにきた。実家へ向かう柳吉に蝶子は、父親の息のあるうちに、晴れて正式の夫婦になれるように頼んでくれ、うんと言ったらすぐ駆けつけるから連絡してと送り出し、大急ぎで柳吉と自分の紋付を拵え葬式に出席する用意をした。しかし電話で連絡してきた柳吉に、お前は来ん方がええ、来たら都合が悪いと言われ、蝶子は発作的にガス自殺を図った。蝶子は何とか一命を取りとめ、サロンの常連客の新聞記者が同情的な記事を書いた。柳吉は葬式を口実に一月ほど行方をくらまし、途中、種吉宛てに蝶子と別れるという内容の手紙を寄こしていた。蝶子の元へ戻った柳吉は、蝶子と別れた風に養子（妹の夫）に見せかけるためだったと言い、蝶子を法善寺境内の「めをとぜんざい」へ誘い、二人で仲良くぜんざいをすすった。蝶子はめっきり肥えていて、その座蒲団が尻に隠れるほどだった。

やがて蝶子と柳吉は浄瑠璃に凝りだし、柳吉は蝶子の三味線で「太十」を語り、素義大会で二等賞を貰った。景品の大きな座蒲団は蝶子が毎日使った。

『夫婦善哉』感想文

ざっくり言うと、柳吉の駄目男ぶりが凄い作品だと思いました。

『きりぎりす』の奥さんと柳吉が一緒だったら Win Win だったんでしょうか。でも、そんな話つまらないでしょうね。

柳吉は、家庭や身を滅ぼすほど遊ぶ才能はあるのだけれど、仕事の才能が無い。そして、すぐに飽きてしまう。

蝶子も、柳吉を一人前にしようと努力するけど、二人が同じ方向になかなか進まないのがこの話の骨組のような気がしました。

蝶子は、本当は自分でもやりたい事があったけど、お金が無いから貯金に専念するも、柳吉が鬼のようにその金の価値を分かっておらず遊んでしまうのが悲しい。

柳吉は、そういう意味では孤独に耐える遊び方を出来なかったのも、遊び方も下手なのかもしれないと思いました。

嫌な事があると、すぐ何処かに行ってしまう柳吉にあまり共感出来なかったのも、蝶子におしおきをされたり、おまじないとして猫の糞入りの味噌汁を飲まされたりする場面では笑ってしまいました。

この夫婦は、何度も別れの機会がありましたが、一緒にいてもプラスマイナスゼロむしろマイナスの夫婦かもしれないけど、お互いに嫌なところが見えてもそれでも離れないというのが夫婦なのかもしれないな～と思いました。

唯一の夫婦の共通点として浄瑠璃に凝りだしたのが良かったなと思いました。

そして、一人よりも二人の方が良いと傷付けあいながら生きていくのだろうと思いました。

僕が読んで感じたのは、蝶子の両親が良く出来た人達で、種吉は関東煮屋の手伝いを撥ね付けられたことを気にしていなかったり(西瓜の切り方も豪快で素晴らしい)、お辰は病床で私に構わず柳吉のところへ行ってやれなど考えも仏のようになっており、蝶子の夫婦もいずれそうならいけばいいなと思いました。

今後の『続 夫婦善哉』もいつか読んでみたいと思います。

(おわり)

イノマンさんのブログです。 『イノマンブログ』 <http://ameblo.jp/inoman-1984/>

『夫婦善哉』感想文

蝶子は柳吉のどこに惚れたのかよく分からなくて私なりに考えたところ、中風で寝ている父親に代わり商売を切り廻している様子

(引用はじめ)

耳に挟んだ筆をとると、さらさらと帳面の上を走らせ、やがて、それを口にくわえて算盤を弾くその姿がいかにも甲斐甲斐しく見えた

(引用おわり)

という所なのかなと思いました。

丁稚に仕事の指示を出してる姿がかっこ良かったのかな？と、想像してみました。

蝶子はしっかり者で前に出るタイプだから柳吉はふらふらして遊んでばかりいたのかもしれないけど、一途に柳吉を思う気持ちはすごくて私には真似の出来ない事だと思いました。

ふと、B'zの歌の歌詞を思い出しました。

[『愛しぬけるポイントがひとつありやいいのに』](#)

蝶子にはこのポイントがあるのだとしたら幸せなのではないかなと思いました。

柳吉にお金を使い込まれたり、浮気されたりと二人は別れた方がいいのではないかと思ったりもしましたが、こんなに波瀾万丈な夫婦は現実にはなかなか無いと思うけれど、喧嘩もしながら色々な事を二人で乗り越えて年を取って行くのが夫婦ってものなのかもしれない。

夫婦善哉というのは、苦労はあっても一人より二人でおった方がええやろ？ って事なのかもしれないなと思いました。

最後までハラハラしながら読んでいましたが二人が仲良さそうな感じが伝わってきてホッとして読み終える事が出来て良かったと思いました。

(おわり)

夫婦善哉 織田作之助 読書感想文

物は相談やが駆け落ちせえへんか。

必殺技だ。惚れた若旦那にそんな口説かれ方したらイチコロだ。大阪のおおだなの坊ん坊んは放蕩癖があり仕事には辛抱がない。どこが魅力かカッコ良かったのか、そんな柳吉に惚れこんだ。蝶子は旦那をしくじった。

僕と共鳴せえへんか。

必殺技その二。カフェーの女中もイチコロだ。まったく何を考えているのやら。せつかく二人で商いを始めたのに浮気癖はまったく治らない。可愛い娘を実家に置いたまま勘当され、度ごとに無心にゆくが帰参は実らない。

惚れた女の弱みなのか、可愛いところがなきやとつくに捨ててるはず。柳吉も浮気はするが折檻覚悟で必ず帰ってくる。こんな二人はお似合いだと思うけど、友人らは言う。

あんた維康さんに欺されたはる。

二人の縁は不思議と切れず、蝶子は正式な夫婦になりたかったのだが叶わない。柳吉の父親はいつまで経っても許してくれない。そして蝶子は決心する。

惟康を一人前の男に出世させたら本望や。

芸者魂か根性か。蝶子ががんばるほどに反比例して柳吉は無責任さが増すばかり。この二人はこの関係だから丁度よく、仲良きことは美しき。それが夫婦というものかと。

切ないあれこれも喜劇に仕上がるのはセリフ回しの軽妙さ。柳吉のダメ男っぷりも蝶子の愛嬌も夫婦愛がしみじみ沁みて応援したくなる。夫婦で訪ねる法善寺横丁の善哉屋。男はウンチク垂れるが女はピシヤリ。

一人でいるより女夫でいる方が良えいうことでっしゃろ。

頼り甲斐あるなあ。めおと善き哉。男と女はツガイで一つ。一つの腕も夫婦で分けて幸せはんぶんこ。

生活は安定しないし浮気にハラハラしながらも蝶子は柳吉を心底愛しているので信じて待ってる。二人は共白髪になるまで寄り添い続けるだろう。

腹の決まった女は強い。そして可愛らしい。

二人はええ塩梅。美味しい善哉みたいに甘くてちょっとしょっぱい。

(おわり)

『夫婦善哉』の感想文

織田作之助の「夫婦善哉」を初めて読んだ。昭和 15 年に描かれた作品だが、作中に戦争の影はなく、大阪のその日その日の糧を得るのに懸命な一組の男女の生活の、主に蝶子の苦勞が描かれている。

柳吉は「生ける負債」といった感じの男で蝶子が芸者などして稼いできたわずかばかりの金を繰り返し芸者遊びに浪費する。二人は少しまとまったお金ができると店を開いては蝶子は甲斐甲斐しく働くが、また柳吉が放蕩して使い果たして足を引っ張る。文無しになって帰ってきた柳吉に腹を立てて折檻を加えるが、蝶子は柳吉と別れるつもりは毛頭ない。蝶子が望むのはただただ柳吉の実家に柳吉と蝶子が夫婦になったと認めてほしいのだ。そこにはすでに妻子があった柳吉を蝶子が奪ったという後ろ暗さも伴っていた。その後、柳吉が足を引っ張ったせいで病気の母の死に目にも会えなかった蝶子の気も知らず、実家から金を掠め取るための口実と言って実家に「蝶子と別れた」とまで言おうとする。それにはさすがの気丈な蝶子も耐えられず、ガスを引き込み自殺を図る。その後わずか 1 ページで夫婦らしくなったところを見せて終わる。

この作品で感じたのが蝶子の精神的な強さだ。「今の時代、先が見えないことが不安」というが、この時代もちろん先なんて見えなかっただろう。現代の私から見るとお金ができては思いつきで店を開こうという考えはまず浮かばない。ましてや苦心して働いた金を夫に放蕩で使い果たされたら、すぐに離婚沙汰だろう。それでもめげずに蝶子を動かしたのは現代の視点で見ると馬鹿らしくなるほど強固に「夫婦（柳吉の妻）として認められたい」という信念だ。これは信仰と言ってもいいかもしれない。

蝶子が身を粉にして働き、自身の体調や内面など気にしていない。自分が蝶子の立場になったら鬱になってしまうだろうと私が思うのは私が（あるいは現代人が）自分の内面を見つめすぎることによるのかもしれないと感じた。

（おわり）

『 オチる人生 』

「夫婦善哉」を石川さゆり氏は、情感たっぷりに歌う。

「他人（ひと）には見えない 亭主（おとこ）の値打ち 惚れた女にや よく見える」と歌うが、柳吉に値打ちなんてものがあるんかい！ とツッコんでしまうほどのだめんずだ。そうツッコまれるのがわかっているのか「ないないづくしも 才覚ひとつ」ときたもんだ。「辛抱がまんの花がさく」と続くが、いくらでも花を咲かせてくれー！ ってな感じで、他人の理解を超えた蝶子と柳吉だ。惚れた弱みと言われればぐうの音も出ないが、私は幸いにして、惚れた弱みで人生を棒に振ってはいない（と、思う。）… あれ?! でも、それはそれで幸せなことなんだろうかと思うくらい、蝶子には悲愴感がない。人間は、「幸せ」を意識しているときは「幸せ」ではないと聞いたことがある。本当に幸せな時ほど幸せのことは考えない。まさに、蝶子がそうだ。それでも、人が思うほどに平気ではない蝶子だが、（たまに）仕事をしている柳吉を見てしまうと惚れた心持ちが復活してしまう。

しかし、そのスイッチが効かないときもある。それは、柳吉が妹にお金を無心しているとバレたときだ。蝶子は「一人で座敷を浚って行かねばすまぬ」気性の持ち主で、柳吉がどんなにだめんずでも自分なら支えていけると自負していた。蝶子の甲斐性に反発したかったのだろうが、きっと柳吉はこれからも地雷を踏み続ける。それが続くと、蝶子のガス自殺（未遂）のような取り返しのつかないことになるが… 柳吉は気が付かないだろう。

それでも、どんなにしんどい人生でも、「オチ」ればいいのだ。ここは大阪だ。最後に「オチ」れば、どんなことも帳消しなのだ。

柳吉が悪びれもせず帰ってきた際に、ふたりでうまいもんを食べに行く。蝶子は、その店の阿多福人形そっくりだった。阿多福人形そっくりの中年の蝶子と夫婦じゃないのに「夫婦善哉」を食べる。その後、ふたりで凝りだした浄瑠璃の景品で大きな座布団を貰い、蝶子はさらに大きくなった尻で座る。傍目には「落ちる」人生でも、その座布団を使い続ける限り、割れ鍋に綴じ蓋のふたりは「オチ」続ける人生なのだ。あー、なんだか（少しだけ）羨ましいかも。

（おわり）

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

『夫婦善哉』 読書感想文

この小説は、律義者と勘違いして惚れてしまったどうしようもないぼんぼん、柳吉に、人気のある芸者、蝶子が泣かされまくるという内容とは裏腹に、タイトル通りになんだか夫婦って、いいもんだな、としみじみしてしまう不思議なパワーがあります。

嫌味のない関西弁や実際にある街並みや食べ物屋、細かな銭勘定を織り交ぜた独特な言い回しの文章はどこをとっても面白いです。例えば、柳吉との出会いを「一本になった時の旦那をしくじった」と不吉な予言のように書いていたり、不倫が原因で親爺に追い出され、蝶子の実家に居候している身のくせにカフェのお姉さんを、「僕と共鳴せいへんか」と誘おうとしたり、本当にどの文章をとっても、こんな調子です。

蝶子と柳吉は生活の為に、商売をはじめますが、ことごとく出したお店を潰してしまいます。頑固な親爺の期待に添えず罪悪感からか、放蕩に走るしか術のない柳吉、その頑固親爺を見返す為に、立派な男に育てたいという蝶子からの強い期待、これが恐怖のループになって上手くいかないのかもしれないかもしれません。八卦見の「あんたが男はんのためにつくすその心が仇になる」「男はんの心は北に向いている」これが全ての元になっていて、蝶子はあくまでも頑固親爺を見返すという意地があるだけなので「蝶子は自分の甲斐性の上にどっかり腰を据えると、柳吉はわが身に甲斐性がないだけに、その点がほとんど虫好かなかったのだ。しかし、その甲斐性を散々利用して来た手前、柳吉には面と向っては言いかえず言葉はなかった。」という無限ループ地獄になってしまっているのだと思いました。

最後に、やっぱり一番気の毒に思ったのは、柳吉の娘です、蝶子の対応が無神経なのが気になりました。

(おわり)

『末永く、幸せに』

蝶子は、出会ってから3か月で柳吉への献身が体に「刷り込み」された。不幸にも最初に柳吉をしっかりと頼もしい男だと思い込んでしまった。柳吉と駆け落ちしたとき関東大震災という天災に遭遇したことも手伝って、蝶子は柳吉と二人であらたな生活を送る決意を固める。

「こんど二階借りをやめて一戸構え、ちゃんとした商売をするようになれば、柳吉の父親もえらい女だと褒めてくれ、天下晴れての夫婦になれるだろうとはげみを出した」（青空文庫 26 ページ 5 行）これが、蝶子が自らに課したミッションのように私は捉えた。

商売を立ち上げることもたたむことも並大抵の苦勞ではないと想像するが、何度失敗に終わっても変わらぬモチベーションで立ち直り、また次のしかけを試みる蝶子。いったん心に刷り込まれたら、たとえ相手の男性が柳吉のようにだらしがなくても大して問題ではないかのように。蝶子には理屈では説明できないものを感じる。蝶子に共感（同情）して手を差し伸べる人もいた。運も努力のうちで、おきんといい、柳吉の妹や金八にしても、蝶子のエネルギーに感服しての金銭的援助だったと思う。

それにしても、私ならこれだけ騙されたら軌道修正することも考えると思うが、なぜ蝶子はここまで強固に柳吉に献身し続けられるのか。柳吉への献身そのものが蝶子の自己であるとしても、何度騙されてもそれが教訓にならないのは、やはり「刷り込み」としか表現できない。逆に考えれば蝶子だから柳吉についていけるのかもしれない。

若かりし頃に比べ、座布団が尻にかくれるくらい肥満になった蝶子に年季を感じてしまったが、二人で浄瑠璃に凝りだしたのは明るい感じがした。浄瑠璃はお互いの気持ちを表現する媒介になるのでは？ Wikipediaによると、太十は「悲壮感が追い打ちをかけるような名場面」らしい。酸いも甘いも噛み分けた二人なら上手に演じられるのではないか。いっそ本業にしたらどうかと思った。

（おわり）

「日本の家制度にあらわれたる夫婦善哉の形式」

蝶子は、芸者としては、たぐいまれなる素質をもちながら、ダメ夫の柳吉に、稼いだものすべてを捧げてしまう。そして何度も、柳吉に裏切られる。一方、柳吉の頭にあるのは、実家のことである。長男で、家を継ぐべき立場だったのに、蝶子と一緒にになったばかりに、家を追い出されて、廃嫡にされてしまう。相続権がなくなることや、娘に会えないこと以上に、ゼロから、自分で一家を成す責任に、最初からめげてしまっている。蝶子の願いは、柳吉ときちんとした所帯と家業をもって、仲睦まじく暮らしていくことだ。長男だったら、お墓も、家業の信用も自分のものだったのに、それらを、新しい所帯で、すべて自分で興していかなければならない面倒が、柳吉にはある。男が、一代で築けるものは、男の器量にかかっている。しかし、柳吉は、器量を試される正念場で、性根が座らない。人はそれを「甲斐性なし」という。どんな商売をやっても長続きしない。また、蝶子の活躍も、彼女の実家の応援も、なんとなく気に食わない狭い心の持ち主だ。廃嫡以前の彼には、蝶子に入れあげるだけの甲斐性があったが、廃嫡以後には、甲斐性どころか、器量もなくしてしまった。中気で寝たきりの彼の親父が的確に見抜いている不肖の息子の器は、家を出れば広がりようがない。蝶子は、寝たきりの柳吉の父に、二人の関係を認めてほしい切ない思いがある。なんとか、自分の手で、柳吉を、世間の誰もがうらやむ男に育て上げようとした。彼女は、柳吉のしぼみつつある器量に、あふれるばかりの情熱を注ぎ込む。しかし、その情熱が、ことごとく柳吉の神経を逆なでするので、やがて、器はひっくり返って、元の木阿弥になってしまう。裏切られるたびに蝶子は、信心深くなる。

器を、二人で更に広げるには、柳吉の覚悟が必要だ。夫婦の器には、それぞれ、応分の白玉があり、沼地のような、汁粉から、なかよく顔を出しているものの、底意はわからない。期待の甘さと腐れ縁、水掛け論、そんな千日前法善寺横丁。

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>